

女性リーダーの登場

校長 相川保敏

この秋、日本で初めて女性の総理大臣が誕生しました。女性が参政権を獲得してから80年目にして初の女性首相が誕生したということで、海外でも「ガラスの天井（性別や人種などを理由に能力や実勢のある人が昇進できない見えない障壁の比喩）」を破ったと評しているメディアも見られます。

日本の政治の世界は、世界経済フォーラム（WEF）が毎年公表するジェンダー・ギャップ指数をみると、148カ国中118位です。ジェンダー・ギャップとは男女間格差のこと、健康分野（50/148位）、教育分野（60/148位）で、経済分野（112/148位）、政治分野（125/148位）となっており、女性の賃金格差、管理職比率、政治参加などの評価の低さが低迷の原因となっています。男女間格差の是正はなかなか進まず大きな社会問題となっており、今回の首相就任は単なる政権交代にとどまらず、社会の意識の変化を象徴する出来事として、大きな意味をもっていると考えられます。

一方、海外ではいつ頃から女性が国家のトップに就任したのでしょうか。先進7か国（G7）を見ると、まず「鉄の女（Iron Lady）」の異名を持つマーガレット・サッチャー氏が1979年イギリス初の女性首相に就任しています。続いて、在任期間は4か月と短命でしたが、キム・キャベル氏が1993年カナダの首相に就任しています。ドイツでは、2005年にアンゲラ・メルケル氏が初の女性首相に就任し、16年間という長期政権を樹立しています。イタリアでは2022年ジョルジア・メローニ氏が首相に就任し、現在も在職中です。そして、2025年高市早苗氏が日本初の女性首相に就任しました。まだフランス・アメリカでは女性が国家のトップである大統領に就任したことはありません。世界全体に目を向けるとG7より20年近く前に女性元首を選

出した国もあります。それはスリランカ（当時セイロン）です。今から遡ること65年前の1960年にシリマヴォ・バンダラナイケ氏が首相に就任しています。政治面で性別の壁を初めて打破した人と言えます。また、アフリカ初の女性元首となったリベリア大統領エレン・ジョンソン・サーリーフ氏は、2006年に就任し、長年の内戦で荒廃したリベリアにおいて平和を確立し、国家再建と汚職対策に尽力しました。平和構築への貢献が評価され、2011年にノーベル平和賞を受賞しています。このように世界の国々には数多くの女性元首が登場した歴史があります。

先日の朝会で、7～8割程度の子どもたちが日本の首相を知っていると答えてくれました。子どもたちは、国際的な会議や他国元首との会談、国会答弁など、毎日のようにメディアに取り上げられることで、「女性総理大臣」の働きを認識しているのでしょう。政治姿勢に対する評価は賛否両論分かれるところですが、現在の日本の代表は「女性」という認識が定着していくと思われます。これまでより、日本や世界の出来事に対する興味・関心も高まる可能性もあります。さらに1学期の小学校だよりも触れたように、女性が日本のリーダーとして活躍する姿をロールモデルとして、「自分もできるかな、やってみたいな」という希望が芽生えてくることも考えられます。特に本校の子どもたちは元々ジェンダー・バイアスにかかりにくい環境にあるため、希望から目標に変わってくることも十分に考えられます。本校の多くの子どもたちは、人のため、世界のために役立ちたいという意識をもっていますので、将来、日本や世界を動かす人になってくれるのではないかと期待しています。

